

5月定例記者会見 会見録

令和元年(2019年)5月10日(金) 11:00～11:35 庁議室

質疑応答

■ G20 茨城つくば貿易・デジタル経済大臣会合開催記念ゼミについて

記者

G20 に関係したイベントは、県や市で数多く企画・実施されていますが、一般市民の方は、G20 に対する機運が高まっていないような気がします。特に若い人はあまり興味がないような感じもします。そのような中で高山中学校の九年生を対象に「世界の経済を考える」というゼミを実施します。他の小学校や中学校、あるいは全校が参加して、何かを実施するなどの計画はありますか。

市長

このゼミに関しては、まずは高山中学校を皮切りに、今年度は市内全学校で開催していきます。G20 を開催するといっても、市民の皆さんは、「何のことだ」と考える方が多いと思います。実際のところ、残念ながら、G7 では市民の方を対象とした意識醸成事業はほぼ行われませんでした。今回、私が常に言っているのは、どういうものをレガシーとして作っていくかということ、そして、そこに市民がどう関われるかということです。そして、決定当初からその部分を意識して、各担当部署に、G20 に関わる取組を打ち上げ花火ではなくて、今後に残るような形で行いたいということを伝えてきました。そのような中、今回の「貿易ゲーム」は、つくばでのテーマを扱うものですし、それを開催前だけに単発で実施し「何かこうやりましたよかったです」というものでなく、一年かけて各学校で実施することによって、「あのときの会合というのはこういうものだったのだな」ということを子どもたちに考えてもらうようなきっかけになればよいと思います。

■ 「つくばフェスティバル 2019」の開催について

記者

G20 開催の関係で、一般の方が参加できるイベントの一つに「つくばフェスティバル 2019」があると思うのですが、どの部分が G20 と関係しているのか教えていただけますか。

市長

つくばフェスティバルは科学・国際性を非常に感じられるイベントです。イベントに出展しているお店は、G20 の関係国もたくさん出ていると思います。そして、今般このフェスティバルの中で G20 関連のイベントとしては、メディアアートの体験活動です。これは昨日から実施してきた「つくばサイエンスハッカソン」の成果発表の場として、つくばサイエンスアートのエキシビションというのを行いましたが、このようなつくばの強みである科学者、科学とアートを組み合わせて作品を作っていくという取組は、非常に未来を感じさせるようなものがあります。特にそのテクノロジーをどう使っていくのかというのが今回のデジタルエコノミーの部分と、非常に親和性が高い部分でもあり、メディアアートの制作体験ができる場所も今回のフェスティバルに用意しました。

政策イノベーション部長

先ほどのメディアアート制作体験について補足させていただきますが、明日 5 月 11、12 の 2 日間のつくばフェスティバルの中でデジタルテクノロジーを市民の方々に体験いただくような機会を作っていきたいということで開催したいと思っております。イベントにつきましては、大きく分けまして 7 つございますが、一つがロボットデザイナーと未来の仕事を考えるといった、デジタルハリウッド大学の星野先生がメインで子どもたちと一緒にデジタルテクノロジーで未来はどういう仕事ができるのだろうということを考えるイベントがございます。二つ目としまして、AR ドローイングのパフォーマンスを体験していただくイベントがございます。三つ目が 3D ペンを使用して実際にアクセサリなどを製作していただく体験イベントも用意しています。その他、バーチャルリアリティの体験であったりとか、V チューバーになってみるようなイベント、先ほど申しましたサイエンスハッカソンのメディアアートの作品展示だったり、e-スポーツの体験と

いったものを用意していますが、基本的に作品展示は11時から17時の間いつでもご覧いただけます。他のものにつきましては、11時から整理券を配布しまして、先着でそれぞれのイベント毎に、例えば80名とか、そういった人数は制限させていただいて、開催する予定となっております。

■メディアアートについて

記者

G20開催の関係で、先日のメディアアートの講演会でも、市長がレガシーとして残したいとおっしゃっていましたが、具体的にこういった取組を今後の活動、レガシーとして残していったような形にしたいのか伺います。

市長

筑波大学の先生方と、昨日少し話したのですが、やはり単発のイベントで終わらせてはいけないので、「なんらかの形で定期開催をしたい」と思っています。併せて、これはまだ私の頭の中にあるだけですが、昨日の議論を見ていく中で、制作形成過程におけるサイエンスとアートの可能性というのは非常に大きいということを改めて感じました。こういった枠組に対して、どういうことをして、行政の中に取り込めるかというのは少し頭の中を私も整理したいです。

記者

海外では、研究所が主体になって、メディアアートを取り込んでいるという活動があると聞きましたが、市だけではなく、もっと研究所主体にさせるようなきっかけや、主体になってもらうような活動も必要ではないかと思いますがいかがでしょうか。

市長

おっしゃるとおりで、研究者の皆さんに、求められていることだろうと思います。今、直接的に求められるわけではなくて、研究者の皆さんが日頃の思考的な枠組から離れてアートとコミュニケーションをすることによって全く別な視野が開けていると思っています。昨日のディスカッション

ョンで非常に印象的だったのは、アートとのコミュニケーションは、実際の研究にも何か今後ヒントがあるかもしれないということです。それは、単にアート作品としてだけではなく、自分の研究にまでフィードバックしていくものだと言っていました。この話を聞き、私は非常に大きな可能性を感じました。しかし、それは実は言われ尽くされていることで、研究者が研究を離れて息を抜いたり、気分転換している時にいろんなひらめきが浮かんでくることはあらゆる世界的な発明とか発見の際に起きていることです。それをつくばという場所で、戦略的に起こすことができればとても素敵だと考えています。単に直線的な発展ではなく、断続的平衡説と言いますが、刺激があって、ある時突然リープするような瞬間がある。このようなことが枠組としてあったら素晴らしいだろうし、研究者の皆さんにとっても価値があることなのだろうと思っています。ただ、まだ思っているだけです。先生方と相談しながら、市が主体となるよりは、我々は機運を高めていく方が良いと思っています。

■つくば VAN 泊について

記者

雑誌でも VAN ライファーが取り上げられていますが、市として今後のアイデアはありますか。

市長

今考えているところです。やはり一回で終わらせては仕方ないと思っていますが、ずっと行政が主体でやり続けるものでもないとも思っていますので、今必要とされているもの、我々がつくば市として VAN ライファーに何を語りかけていくことが一番適切なのかというのを議論していきます。

■学校用地購入の要望について

記者

葛城小学校で、住民から小学校の用地を購入してくれという要望があったということ、ニュースつくばで知ったのですが、実際の対応を教えてください。

市長

実は今朝、葛城小学校の校長先生と現 PTA 会長さんがいらっしゃって、山本副議長と一緒に、改めていろいろ整理されたご要望をいただいたところです。市としても、当然教室が足りなくなるということはあってはいけないと考えており、この度の要望をいただく、いただかないに関わらず、急いで対策が必要と以前から認識していたところです。私自身も実際に平成 30 年 3 月に葛城小学校の状況を見に行きました。教室等がどのような状況であるかを直に見た上で、その後も対応について協議してきましたので、できるだけ早急に方向性を出す所存です。

記者

県有地を買い取って欲しいという話が出ていますが、いかがですか。

市長

今は、どのような可能性があるのかということのをあらゆる選択肢から考えていきます。

■中心市街地について

記者

つくば駅の周辺でマンションの建設等を規制するエリアを設ける話があると思いますが、その後の進捗状況はいかがでしょうか。

市長

先月の話なので、まだ大きな変化はありません。現在、多面的な視点で、どのような形が適切であるのかということを検討しています。

記者

具体的なことは、まだ決まっていないのでしょうか。

市長

そこまではまだ決まっています。

終了